

3 流山市の歴史

(1) 地名の由来

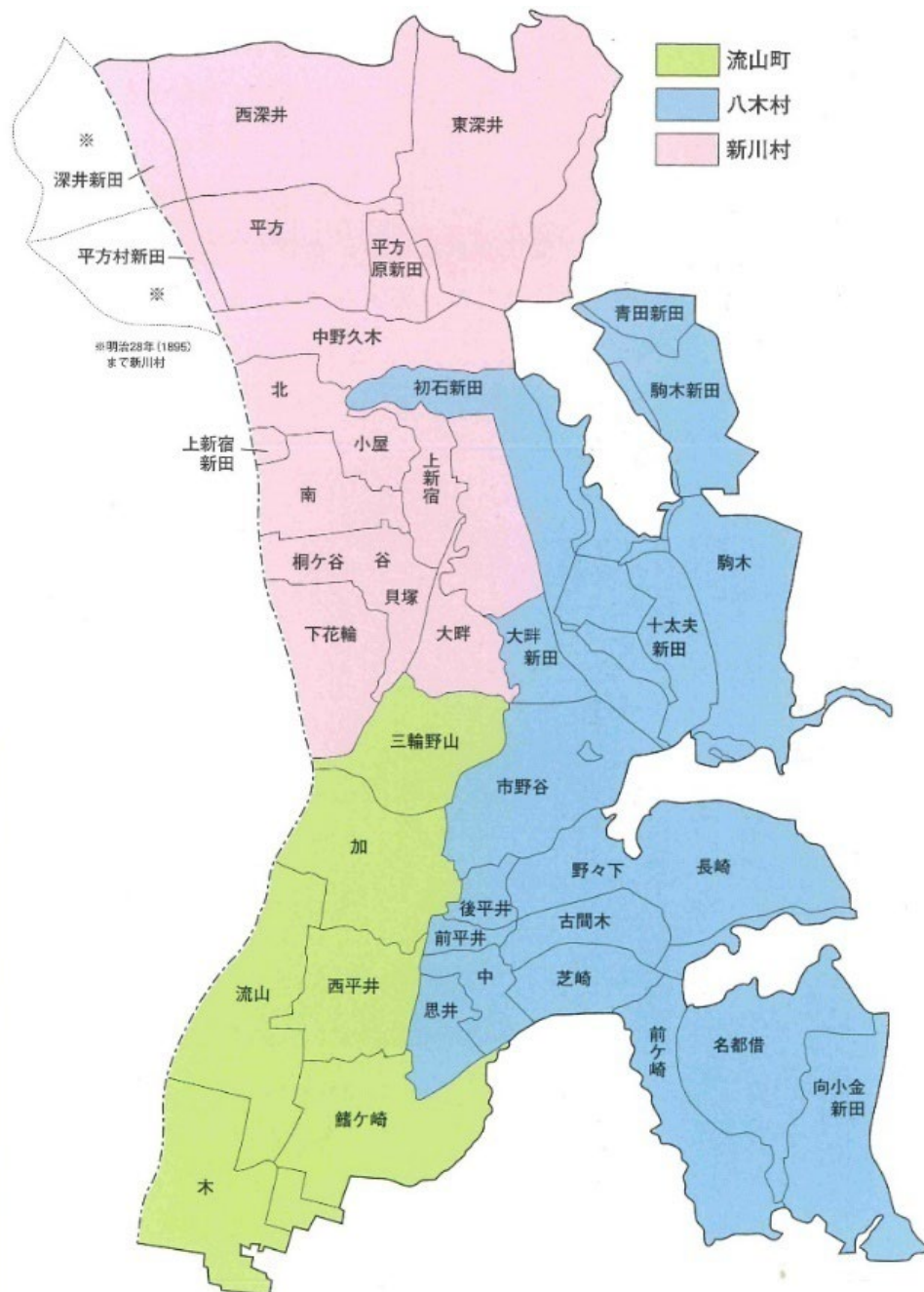
流山 6 丁目に所在する赤城山の山頂にある「赤城祠碑」の碑文には、建長年間（1249～1256）に上州（現在の群馬県）赤城山の一角が崩れ、小山が流れ着いたとあり、「流山」の地名発祥の地とされています。しかし史実としては、建長年間に赤城山が噴火した記録は

ありません。諸説として、上州赤城山に生い茂っていた熊笹が流山の赤城山と同種であるものとか、洪水の際に上州赤城神社のお札が赤城山に流れ着き、これをお祀りしたとの言い伝えがありますが、はっきりとした地名の由来はわかっていません。

「流山」の地名が記録上確認されるのは、慶長19年（1614）の「小金之領野馬売付之帳」に「流山 喜左衛門



流山地名発祥の地 赤城山



流山町・八木村・新川村

図10 明治期の1町2村

尉」とあるのが最初です。

流山市北部の旧新川村は、享保年間に行われた江戸川の改修によってできた直線的な流路を新川と呼んだことが地名の由来となっています。

また、流山市東部の旧八木村は、鎌倉時代前期にこの地を支配した地頭矢木氏が由来となっています。このほか市内の地名には、室町時代後期や江戸時代初めから続くものが多くみられます。

また昭和30年代以降の住宅団地造成に伴って名付けられた江戸川台、松ヶ丘、若葉台、平和台等の地名もあります。

（2）歴史概況

後期旧石器時代（約35,000年前～17,000年前）

市内では、約3万年前から人々の活動が確認されています。つくばエクスプレス線の沿線開発等に伴う発掘調査によって約70か所の遺跡が確認されています。旧石器時代の生活の拠点は、石を採取しやすい水辺に近い台地縁辺にありました。西平井根郷遺跡では、石器の製作跡や焼けた石が集中して出土した調理跡が発見されています。

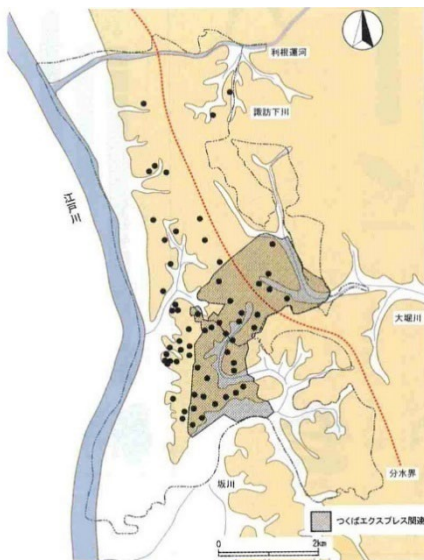


図11 旧石器時代遺跡分布



西平井根郷遺跡出土石器

縄文時代（約17,000年前～3,000年前）

縄文時代は、気候の温暖化に伴い、江戸川や坂川沿いの低地まで海が入ってきます。このため市内には、貝や魚の骨が出土する遺跡が多く発見されています。

早期（約8,000年前）では煮炊きをした炉穴を江戸川や坂川に接する台地の縁辺部で確

認しています。前期になると竪穴住居での定住生活が始まり、若葉台・三輪野山・加・平和台・長崎等では住居内から縄文土器と貝殻が出土しました。三輪野山宮前遺跡では土器を副葬した墓が100基以上確認されています。中期ではムラの規模が大きくなり、住居を環状に配置した大規模な集落が発見されています。中野久木谷頭遺跡は、中央部に広場、それを取り囲むように土坑1,065基、住居跡195軒がある直径200mの環状集落です。発掘調査では大量の土器のほか、クルミ等の堅果やカレイ・スズキ等の魚骨、マガキ等の貝、イノシシ・シカ等の獣骨、クジラの骨等が出土しました。後晩期では、大規模貝塚が多く発見されています。市内では三輪野山貝塚・上貝塚貝塚・上新宿貝塚という3つの大きな環状貝塚があります。このうち三輪野山貝塚は後期から晩期にかけて約1,400年続いた遺跡です。発掘調査では、貝層から土器や石器、貝や動物の骨を加工したアクセサリー、クルミやクリ等の堅果、ハマグリ等の貝、クロダイ・アジ等の魚骨、イノシシ・シカ等の獣骨が多く出土しました。さらに環状に盛土した遺構や道路造成した土木工事の跡、新潟県糸魚川産出のヒスイを使って垂飾品を作っていた跡が発見されています。広場では祭祀が行われ、土偶や土版、石棒等の遺物が多く出土しました。三輪野山貝塚は、生産・加工・祭祀の遺物が出土した県内で有数の縄文時代後晩期の貝塚です。



図12 中野久木谷頭遺跡全体図



三輪野山貝塚 貝層

弥生時代（約3,000年前～西暦250年頃）

縄文時代に比べ、遺跡数や集落の規模も小さく、生活しにくい環境だったようです。博物館のある加村台遺跡で環濠や再葬墓を伴った小規模な集落が見つかっています。下花輪林下遺跡では中期から後期にかけての竪穴住居や環濠、方形周溝墓が発見されました。



加村台遺跡の弥生時代建物跡



加村台遺跡の弥生土器

古墳時代（西暦 250 年頃～710 年）

市内で築かれた最古の古墳は、流山警察署のそばにあった 3 世紀前半の三輪野山向原古墳です。1 辺 22m、高さ 1.5m の方墳からは、鉄剣やガラス玉等が出土しました。古墳の周辺遺跡からは 3～5 世紀の竪穴住居跡が 200 軒以上発見されており、向原古墳に葬られた人物は、この地を開発した有力者の墓と考えられます。4・5 世紀代の古墳はありませんが、6 世紀には流山市北部の東深井で古墳が造られます。東深井古墳群は、利根川から続く樹枝状に広がる谷津に接する台地縁辺に流山・柏・野田の 3 市にまたがって分布する古墳群で、6 世紀前半から 7 世紀前半まで継続して 30 基以上の古墳が造られ、前方後円墳と円墳で構成されていました（現存は 13 基）。東深井古墳群の特徴は、埴輪を伴っていることです。7 号墳では魚形埴輪、9 号墳では盾持ちの埴輪等が出土しています。流山市南部には、全長 25m の前方後円墳鱒ヶ崎三本松古墳がありました。発掘調査では、古墳は中世に大きく破壊されていることが判ったほか、古墳上や周囲から出土した埴輪から 6 世紀中頃に造られたことが判明しました。7 世紀前半には、加北谷津古墳が造られます。この古墳は、1 辺 10m の方墳で横穴式石室と副葬品のガラス玉等が発見されています。埴輪が出土しないことや方墳であったことは、この地域の終末期古墳の特徴です。

集落遺跡は、古墳時代を通じて多く発見されています。前期は、三輪野山向原古墳を中心とした周辺に 200 軒以上、中期・後期は常磐自動車道流山インターチェンジより南の江戸川沿いの台地縁辺に 500 軒を超える竪穴住居跡が確認されており、弥生時代に比べて住みやすい環境であったようです。



鰯ヶ崎三本松古墳



東深井 9 号墳出土埴輪

奈良・平安時代（西暦 710 年～1185 年）

奈良時代には、古墳時代と同じく、江戸川沿いの台地縁辺の三輪野山から鰯ヶ崎では大きな集落が展開します。三輪野山宮前遺跡の竪穴住居内からは、下総国分寺で使われたものと同じ形の瓦が、三輪野山北浦遺跡では皇朝十二銭の隆平永寶が出土しました。加町畑遺跡は、集落群の中で最も規模が大きく、竪穴住居や掘立柱建物跡が多く発見されています。遺跡からは、古代の役人が身に付けていたベルトの部品である丸鞆や皇朝十二銭である神功開寶が 2 枚出土しました。さらに平和台遺跡内では、古代寺院が建てられ、下総国分寺で使われたものと同じ瓦が用いられていることが確認されています。このことから下総国の国府や国分寺との関わりが深かったことが窺えます。

平安時代には、古墳時代から奈良時代にかけて継続していた集落のほかに、坂川の谷津に接した台地縁辺に新たな集落がつくられます。前平井遺跡・前平井堀米遺跡・中中ノ台遺跡・思井上ノ内遺跡・思井堀ノ内遺跡は、天平 15 年（743）に出された墾田永年私財法の発布以降に形成された開墾集落です。集落の特徴は、古墳時代から続く集落に比べて、掘立柱建物、墨書土器が多く見られる点です。

古墳時代から続く大規模な集落と開墾集落は、10 世紀になると急激に規模が小さくなり、平将門の乱や平忠常の乱以降は、集落は消滅します。

流山市北部は遺跡が少ない場所ですが、東深井と富士見台で製鉄遺跡が確認されています。富士見台第Ⅱ遺跡では、鉄をつくる溶鉱炉と燃料材をつくる炭窯、工人が住む工房の建物が発見されており、一般集落とは離れた場所にあるのが特徴です。



加村台遺跡全景

鎌倉・南北朝・室町・戦国・織豊時代（西暦1185年～1603年）

平安時代の後半から鎌倉時代の初めにかけて、市内での遺跡は確認できません。鎌倉時代になると流山市付近は、葛飾郡矢木郷と呼ばれ、千葉氏の一族であった地頭矢木氏が支配していたことが香取市に残る香取神宮文書で確認できます。近年の発掘調査で思井堀ノ内遺跡からは、堀と掘立柱建物を伴う方形居館と方形周溝区画墓が、西平井根郷遺跡からは、鏡を伴う墓が発見されています。当時、身分が高い人が持つことが出来た鏡が出土していることから八木郷を支配していた地頭矢木式部太夫胤家に関連するものと推定されます。胤家以降、地頭矢木氏の記録は途絶え、戦国時代までこの地域を誰が支配したかは不明となります。

文書や出土遺物以外で鎌倉時代・南北朝時代・室町時代・戦国時代の様子を知るものとして板碑や宝篋印塔などがあります。西深井の安蒜家板石塔婆は、鎌倉時代に造られたもので、千葉県有形文化財に指定されています。

室町時代後期から戦国時代になると、市内各所に現在まで続く集落が確認できます。松戸市平賀の本土寺には中世後期からの過去帳が残されており、深井・桐ヶ谷・矢木・名都借・前ヶ崎等の地名や住んでいた人物の名が記されています。発掘調査では、三輪野山・加・市野谷・前平井・平和台・西平井等で集落跡を確認しています。

戦国時代には、松戸市小金大谷口城を本拠とする高城氏が支配します。市内には深井城、花輪城、前ヶ崎城、名都借城が築かれ、古河公方足利氏や関東管領上杉氏、下総の守護大名千葉氏との領地争いの地になり、市内で合戦が行われた記録も残っています。芝崎の吉野氏は、高城氏と主従関係を結んだ家で、市内では貴重な中世文書が残されています。

織豊期の様子を知ることができる史料として、天正検地帳があります。長崎・谷津村の田畑・屋敷や村の様子が窺えます。



西平井二階畑遺跡全景

江戸時代（西暦 1603 年～1868 年）

市内には約 40 の村が存在していました。村の支配は、幕府直轄領、旗本領、幕府領と旗本領の相給、駿河国田中藩（現：静岡県藤枝市）本多家の飛地領に分かれており、所領の年貢の他、小金牧の御用や小金宿・草加宿への助郷のほか、水戸藩の鷹場御用を務めていました。

流山市を含めた千葉県北西部には、幕府の馬を放牧する牧場「小金牧」が広がっており、市域の一部の村々も含まれていました。牧は江戸時代中期以降、新田開発が積極的に行われ、市内には駒木新田（現：駒木台）、青田新田（現：青田）、初石新田（現：東初石・西初石、おおたかの森北・西）、大畔新田（現：西初石）、十太夫新田（現：おおたかの森北・東）などの新田村が成立します。この新田開発が、流山市と柏市の市境が複雑になるきっかけとなります。新田開発により牧と生活の場が近づくと、その境界には野馬土手と呼ばれる土手が築かれるようになりました。現在、開発により野馬土手はほとんどなくなっていますが、柏市との境界にある松ヶ丘野馬土手には県内でも数少ない二重土手が現存しています。また、寛政期に小金牧の改革に尽力した幕府役人岩本石見守は長崎に「岩本大明神」として祀られています。

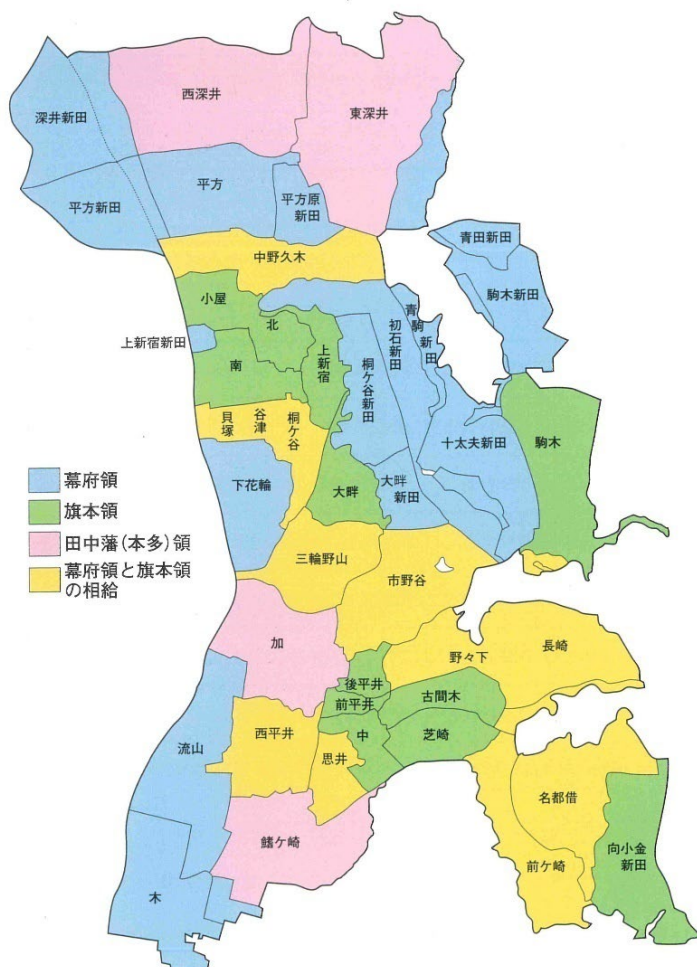


図 13 江戸時代の支配領域図

流山に水運や醸造業の発展をもたらししたのは、幕府による江戸川の開削です。江戸川は、中世には太日川と呼ばれ、渡良瀬川から現在の東京湾に注いでいたと言われています。徳川家康は江戸に移って以降、河川改修を積極的に行い、利根川を銚子に注ぐ東遷事業を行うとともに、江戸川を開削・整備し、銚子と江戸をつなぐ舟運を整備しました。

流路整備に伴い、市域では加岸と流山に幕府公認の河岸が設けられ、物資の集積地として発展しました。江戸川を下れば1日で消費地江戸に着けること、米や水に恵まれたことから流山では醸造業が

発展します。江戸時代後期には醸造業を営んでいた5代秋元三左衛門と2代堀切紋次郎が「白みりん」を開発し、「天晴みりん」、「万上みりん」として売り出しました。この2大ブランドは江戸の食文化に大きく貢献しました。

文化面では小林一茶と 5 代秋元三左衛門の親交が知られています。5 代秋元三左衛門は俳号を双樹といい、葛飾派の俳人として一茶との交流を深めました。双樹と一茶は親密な間柄となり、一茶は 50 回以上流山を訪れています。一茶はこの地に多くの俳句を残しており、一茶が訪れた秋元家は、現在一茶双樹記念館として整備されています。

農村部では、松戸市との境を流れる坂川改修が行われました。坂川は「逆川」とも呼ばれ、大雨が降るとしばしば氾濫し、周囲の村々は大きな被害を受けてきました。このため、鱈ヶ崎村の名主渡辺家は、文化～天保期に、坂川改修事業を行いました。現在、その業績をたたえる石碑「阪川治水碑」が鱈ヶ崎の東福寺に建っています。

幕末・維新期の戊辰戦争では、新選組が流山に陣を敷きますが、新政府軍に包囲され、局長の近藤勇は出頭し、副長土方歳三は会津・函館に転戦することになり、近藤と土方の

離別の地となりました。

明治・大正・昭和前期（西暦 1868 年～1945 年）

幕末の混乱期、駿河国田中藩の飛地領であった加村には、藩士の退避場所としての御屋敷が設けられました。明治 2 年（1869）に葛飾県が成立すると、田中藩の屋敷が県庁として利用されました。明治 4 年（1871）には印旛県が成立します。葛飾県・印旛県が置かれた時期には流山に県庁が置かれていました。明治 5 年（1872）に学制が発布されると、流山 2 丁目の常与寺には教員を養成する「印旛官立共立学舎」が設立され、あわせて県内で最も古いと言われる「流山学校」も付設されました。明治 6 年（1873）、千葉県が成立すると県庁は、千葉市に移転しますが、舟運を中心とした流山の発展は続きました。明治 21 年（1888）に町村制が施行を受け、翌年には江戸時代から続く村を統合した、流山町・新川村・八木村の 1 町 2 村が成立します。

物資の輸送に利用されていた利根川・江戸川は、上流からの土砂の堆積により、関宿付近で船が航行不能となることが頻発しました。その対策としてつくられたのが利根運河です。利根運河は、オランダの技術者ムルデルによって設計され、明治 23 年（1890）に開通します。開通当初は、蒸気船や高瀬舟等多くの船が行き交いましたが、人や物資の輸送手段が船から鉄道へ変化し、また度重なる洪水や渇水により昭和 16 年（1941）でその役割を終えてしまいます。

交通手段が船から鉄道に代わる中で市域では明治 44 年（1911）、県営鉄道野田線が開通し、市内には初石と運河に停車場が開設されました。大正 5 年（1916）には、馬橋一流山間を結ぶ流山軽便鉄道が開業し、流山・鰯ヶ崎駅が開設されます。昭和 10 年（1935）には流山橋が開通し、埼玉県三郷・吉川との間を行き来していた渡船が廃止されました。

昭和後期～現在（西暦 1945 年～2023 年）

昭和 26 年（1951）流山町・新川村・八木村の 1 町 2 村が合併し、江戸川町が誕生し、翌年には流山町に改称します。昭和 31 年（1956）には松ヶ丘団地、昭和 33 年（1958）には、江戸川台団地の分譲が始まり、東京への通勤圏として次第に人口も増えていきます。昭和 41 年（1966）人口が 4 万人を突破し、翌 42 年（1967）1 月 1 日に市制を施行し、流山市となりました。その後も人口増が続く中で文化会館や公民館、小中学校などの公共施設の整備を進め、昭和 46 年（1971）には武蔵野線の南流山駅が開設、平成 4 年（1992）には常磐自

動車道流山インターチェンジが開設されました。

平成17年(2005)には、市内中心部を貫通するつくばエクスプレス線が開業し、流山おおたかの森・流山セントラルパーク・南流山の3駅が設置されます。つくばエクスプレス線開業に伴い沿線の区画整理事業も進み、令和3年(2021)には人口が20万人を超えました。



昭和36年(1961)頃の江戸川台の造成地
(国土交通省航空写真より)



令和2年(2020)流山おおたかの森駅周辺の開発